熱き心は、揺るがない

特別な一年、非日常の中で

令和3(2021)年―伊勢原市が誕生した昭和46(1971)年から数えて半世紀を迎える節目の年。本来であれば多くの人がこの記念すべき年をともに祝い、新しい時代の到来に胸を躍らせることができたはずでした。

しかし、事態は新型コロナウイルス感染症によって大きく変わります。増え続ける感染者を抑えるため、度重なる緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発令・適用により、人々の行動には制限がかかりました。連日のように過去最多の新規陽性者数を更新する時期もあり、今もなお予断を許さない状況が続いています。

長期にわたる自粛生活で心身ともに疲れ、社会全体に一種の諦めムードが漂うこともあった中でも、強い信念を持ち、こうした現状に対峙している人々がいます。

逆境に立ち向かう姿から、この一年を振り返りつつ、次の時代を生きるヒントを探りました。

伊勢原市商店会連合会 おもてなしは無くならない

「サツマイモのキッシュ」を焼く石田さん

インバウンド需要の消失や外出自粛、在宅勤務の広がりに加え、休業・時短営業や酒類提供の停止が要請されていた時期もあり、飲食業界は厳しい状況に置かれています。

こうした事態に対応し、伊勢原市商店会連合会では地元の飲食店を応援するため、フェイスブックやインスタグラムなどのSNSを活用した「いせはらテイクアウト大作戦!」を開始。約40店舗が参加し、「お持ち帰りメニュー」の情報発信などを実施しました。

その中の一つ、フレンチ料理店を営む石田裕志さん(57歳)は18年間伊勢原で営業していますが、こんなに苦しい状況は初めて。でも、こんな時だからこそ発想を転換し、フランス料理の良さを知ってもらうチャンスにしようと考えました。敷居が高そうに感じるかもしれませんが、テイクアウトであれば気軽に注文できます。地場産野菜にこだわったオードブルや季節感のあるコース料理、ケーキやブリュレといった一品料理に至るまで、お客さまの要望に沿いながら、幅広く提供できるよう心がけています」と話します。

容器や盛り付けなど、各店ごとに工夫を凝らしたオリジナル弁当

温かい言葉に支えられて

平成30(2018)年7月に開店した中華レストランのキャッチフレーズは、「食事をするのは笑うため」。女性一人でも気軽に来店できる店を目指し、カフェをイメージした居心地のよい空間が創出されています。「オープン後の1年半は、メニューの充実や新規顧客の開拓など、軌道に乗せていくことに必死でした。そのため、コロナ禍は営業目的を再考する機会になりました。友達や家族、恋人と過ごす生活の一部に外食はあり、いつもと違う付加価値を提供することが飲食店の役割だと思います。

お客さまからの『また来るね』『頑張ってね』という言葉に励まされながら、営業を続けています」と店主の藤原光宣さん(44歳・白根)は語ります。

来店者の笑顔を思い浮かべながら調理を行なう藤原さん

特別な時間を演出するため、「注文を受け」「調理をし」「料理を運ぶ」。その一挙手一投足に気を配り、おもてなしの気持ちを大切にする飲食店の心意気を感じることができました。

プレミアム率30%

伊勢原駅チカ いきいきプレミアム商品券が販売されます

感染症により影響を受けた店舗の支援と商店会活性化のため、プレミアム付き商品券が発行されます◇どなたでも購入可能。詳しくは、問い合わせ先のホームページ、または下のQRコードからご確認ください。

問伊勢原市商店会連合会☎95-3233

社会福祉法人縁友会 みどり園 安心できる空間であるために

39人の職員が交代制で、施設を利用する人々の生活を24時間サポートしています

「襟足、少し伸びてきたみたいだね。年末に向けて、すっきり切ってもらおうか」。

車いすをゆっくりと押しながら、優しく語りかける職員の声が聞こえてきます。11月上旬、粟窪にある市内唯一の障がい者支援施設(入所)のみどり園では散髪が行われていました。

主に知的障がいのある利用者68人が一緒に過ごす施設内。一人一人の特性や、その日の体調などを丁寧に把握し、声のトーンや口調、表情に気を付けながら接する光景が見られました。

散髪は、月に1度行われています

個性を理解し、寄り添っていく

「新しい生活様式の必要性が理解できなかったり、触覚・嗅覚などの感覚過敏によって、マスクの着用が困難だったりする利用者が多くいます。また、表情が見えないことに不安を覚え、家族や支援者がマスクをすることを嫌がるケースもあります。

そんな状況の中で一番気を付けているのがクラスター*です。換気の徹底や手洗い、可能な限りの黙食といった基本的な対策のほか、利用者の健康状態に留意し、発熱など体調がすぐれない人がいれば、速やかに発熱外来に行き、必要に応じてPCR検査を受けられるよう感染拡大防止対策を強化しました。また、居室や共用スペースの消毒・清掃を朝夕2回行うことで安全な空間を維持し、できる限り以前と変わらない生活をしてもらえるように努めています」と、新實正樹施設長(47歳・田中)は語ります。

人一倍感染症対策を徹底し、親身に寄り添いながら、利用者にとって安全・安心な空間であり続けるための努力が、そこにはありました。

*集団感染のこと。県内では1施設で5人程度の陽性者が判明した場合に認定されます

階段の手すりを消毒する職員(施設内)

12月3日~9日は障害者週間

平成16年に「国際障害者デー(12月3日)」から「障害者の日(12月9日)」までの一週間が「障害者週間」に定められました。

障がいの有無に関わらず、誰もがお互いを尊重し支え合う「共生社会」を目指しましょう。

啓発コーナーを設置します

障がい福祉作業所の製品とともに、啓発物品を配布します。

とき 12月3日(金)~9日(木)の午前8時30分~午後5時

ところ 市役所1階ロビー

問障がい福祉課☎94-4721

オレンジカフェ「あぷりこっと」 目指す先は変わらない

澄み渡った青空の下で、約20人の参加者とともにウオーキングをする中澤さん(先頭)

感染症は高齢者がかかると重症化しやすいとされています。こうした影響の中、ステイホームの推奨により、自宅で過ごす機会が多くなり、運動の機会や人とのつながりをもつ場面が減っています。

本音を言い合える環境づくり

市では認知症の人やその家族などが気楽に集う場として認知症カフェの開催に取り組んでおり、伊勢原北部地域包括支援センターでは、平成31(2019)年2月から「オレンジカフェ」を行っています。

職員の中澤紘代さん(39歳・板戸)は「初めは地域の飲食店でおしゃべりや知識を広めていく機会を持っていました。しかし、感染状況の悪化により開催方法を変更することになり、4月からは当事者などの要望で、ウオーキングやウクレレ鑑賞などを通じた活動を始めました。さいな会話の中から日常抱えている悩みなどをくみ取ることで、困り事の解決に向けて話し合う一助になれば。若い人にも参加していただき、この病気のことを知ってもらいたい。それをきっかけに認知症サポーターやオレンジパートナーになり、ともに活動できればいいですね」と話します。

手段は変われど、「高齢者になっても、いつまでも安心して自分らしく暮らせる地域づくり」という目的に向けた気持ちに変わりはありません。

オレンジパートナーとは

当事者とその家族の見守り役や話し相手になったり、講座などに協力していただいたりするボランティアです。市では認知症サポーター養成講座で学んだことを基本として、認知症に対する理解を深め、より実動的なボランティア活動を希望する人向けに認知症サポーターステップ・アップ研修を開催しており、この研修を修了した人を登録しています◇現在は市内に約80人います

湘南農協温室部会 おうち時間に癒やしの一時を

愛情を込めて手入れ作業を行なう熊澤さん

卒業式や入学式、結婚式…。多くのイベントや冠婚葬祭が自粛される中、誰の目にも触れられずに花が廃棄されてしまう「フラワーロス」が問題になっています。

農林水産省によると、切り花の1世帯当たりの年間購入額は減少傾向で、昨年はピーク時の6割程度(約8千円)。業務用の需要も激減し、流通金額は例年に比べて約4割も下落しています。また、近年の輸入花増加や重油などの資材価格高騰によって花き栽培農家は苦境に立たされています。

心を彩る、伊勢原の華

市内には14軒を超える花の生産者がおり、切り花や鉢物を育てています。カーネーションの温室栽培を行っている熊澤信章さん(58歳・沼目)は「花は天候に左右されやすく、とても繊細。人間と同様、雨が多いとストレスを感じ、元気を無くしてしまいます。今年のように梅雨が長い年は特に気を配り、摘心*などの手入れや小まめな温度管理をする必要があります。それでも手を掛けた分だけきれいに咲いてくれますよ」と語ります。

出荷前には、刈り取ったものを隅々まで確認

花は人生の節目を彩ってくれるもの。また、華やかな見た目と香りから、心に潤いと安らぎが得られる効果があり、気分のリフレッシュにぴったりです。自分自身を癒やすことはもちろん、普段から自宅や職場に飾ったり、大切な人へお世話になっている人に日ごろの感謝を込めて、贈ったりしてみてはいかがでしょうか。

*茎や枝の最先端の芽を摘む作業

イメージ

あふり~な伊勢原店などの湘南農協直売所で購入できます

いせはら みらい・クルリンこども食堂 つながりを感じる場に

真心を込めて作った料理を提供する髙梨さん(食堂はNPO法人地域福祉を考える会が運営)

「うわぁ、おいしそう。いただきまーす」。できたてのご飯がテーブルの上に置かれると、保育園帰りに立ち寄った親子の歓声が響きます。

伊勢原駅前にある「だいろくコミュニティ広場 来るりん」を会場に、毎月第2・4水曜日に主食・副菜・デザートなど、栄養バランスが取れた温かい夕食を低額の料金で提供する「こども食堂」が開かれています。運営するのは、子育てに一段落したベテラン主婦たち約20人。野菜や果物といった食材の多くは地域の人々からの寄付で賄われています。

こうした食堂は、子どもが一人でご飯を食べる「孤食」の解消や、地域交流の場づくりなどを目的に、全国的に広がりをみせており、約五千カ所あると推計されています(NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ調べ)。

料金は大人300円、高校生以下100円で、営業時間は午後5時30分~7時

自由時間の創出にも活用を

この日、調理をしていた髙梨雅美さん(54歳・伊勢原4丁目)は「おいしいご飯を食べてもらいたいのはもちろん、忙しい主婦が自由な時間を作り、子どもとゆっくり過ごしてもらえる手助けになればうれしいですね。子育てのネットワークづくりにも役立ててもらえたら」と話します。

現在は予約制で、30分単位で食事時間を区切っているほか、席に着く前に靴裏の消毒や手洗いをしてもらうなど徹底した感染症対策を行っています。

ご飯を食べて幸せという気持ちを、多世代が同じ場所・時間で共有することで新しいコミュニティーが生まれていきます。

献立は、集まった食材によって決まります

学習サポート みらい・つなぐ 夢に向かう勇気をもってほしい

幅広い世代の講師陣による、熱のこもった指導が展開されています

「水が状態変化するのって何度だっけ」という児童が投げかけた質問に、「プラフで考えてみると分かりやすいよ。ノートに書いてみようか」と、優しい声が応えます。

NPO法人地域福祉を考える会では、市からの委託を受け、経済的な理由などで生活に困窮している世帯の子どもが適切に学習習慣を形成できるように学習を支援する教室を市内各所で開いています。

「真剣なまなざしの子どもたちを相手に授業をするので、自然と力が入ります」と学生の一人は話します。市内にある大学や社会人の協力もあり、設立当初10人だった講師は、現在20人以上が在籍。年々支援の輪が広がっています。

学ぶ意欲を諦めないで

6年前に活動を始めた細谷毅義さん(69歳・高森)は親の収入によって教育格差が広がっていると感じます。学ぶ機会は平等であるべきですが、現実は違う。学校で分からなかったことを放置してしまうことで自信を無くし、不登校になるケースもあります。

そんな時、ちょっとしたコツを伝えただけで、学ぶことの面白さに気付く子は案外多いんです。勉強を通じて、自分のやりたいことや目指したい夢を見つけ、それを打ち明けてくれた時にやりがいを感じますね」と話します。

現在はグループでの学習を個別に切り替えたり、机の距離を空けたりするなどの感染症対策を講じながら、子どもたちが学ぶ場の確保に尽力しています。

指導日時は毎週火・金曜日の午後5時~7時45分